国　　語

第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

１　前　　文

平成15年度から実施の高等学校学習指導要領を受け、平成18年度に試験科目が『国語』に一本化され、本年度は『国語』として６回目の試験である。

高等学校学習指導要領では、必履修科目は「国語表現Ⅰ」及び「国語総合」の２科目とされ、生徒はそのいずれかを選択することとなっている。「国語表現Ⅰ」は適切に話したり書いたりする力など、現代の社会生活に生かすことのできる言語能力の育成を重視している。「国語総合」は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」及び〔言語事項〕の３領域１事項から内容を構成し、古典と近代以降の文章を含む総合的な科目である。標準単位数は「国語表現Ⅰ」が２単位、「国語総合」が４単位である。

高等学校「国語」教科担当としての立場から、本年度の試験問題を検討した。検討を加える視点として次の５点を設定した。

⑴　高等学校学習指導要領の目標・内容等にそった問題（素材文・設問）であったか。

⑵　高等学校における授業や学習活動の実態に配慮がなされた問題であったか。

⑶　受験者の基礎的・基本的な国語力を幅広く総合的に判定し得る問題であったか。

⑷　素材文は「国語表現Ⅰ」「国語総合」の教科書で扱われる程度のものであり、高校生が読むのにふさわしく、魅力的なものであったか。

⑸　設問は、内容・形式・選択肢などによく検討が加えられ、受験者の読解・思考過程を想定するなどの配慮がなされていたか。

以上の視点に立ち、「試験問題の内容・範囲等」「試験問題の分量・程度等」「試験問題の表現・形式等」の面から、第１～第４問までそれぞれに検討を加えて、評価し意見を述べる。

２　試験問題の内容・範囲等

第１問　鷲田清一（きよかず）「身ぶりの消失」（平成18年出版の『感覚の幽（くら）い風景』所収）からの出題である。身体論を専門とする鷲田氏の評論は入試で頻出しており、受験者も教科書や問題集でおそらく何度か目にしているはずである。今回は住居のあり方とかかわらせた身体論であるが、議論の抽象度はさほど高くはない。本文は、約4,200字である。

問１　すべて常用漢字からの出題である。㈠「挙措」は受験者にとってあまりなじみのない熟語であるが、直後の「立ったまま」という表現から推測は可能。㈩「更地」は訓読みを絡ませた出題で、正答の「更迭」という語彙（ごい）を知っているかどうかで差がつく。この２問はかなり難度が高い。

問２　本文前半にある「からだが家のなかにある」という、傍点付きで含意のある表現内容を読み取らせる設問である。傍線部前後の記述を適切に言い換えたものを選べば正答は得られ

る。選択肢は簡潔で素直な記述になっており、内容を問う最初の設問として望ましい難易度である。

問３　本文中盤にある「空間が……先回りしてしまってはいけない」という主張の根拠を読み取らせる設問である。昨年度の問２～５は、すべて「どういうことか」という内容説明型の設問であったが、今回は「根拠・理由」を問う設問に１問差し替えられた。③を自信を持って落とすにはきちんとした本文読解が必要となる、適切な設問である。

問４　本文後半にある「この空間には『文化』がある」という、「　」付きで表現された「文化」という語の内容を読み取らせる設問である。傍線部を含む段落に青木氏の「文化」の定義があり、「行動基準」はキャンセルされないままで、「その関係から新たな機能を探る段階」とあるのを見逃さなければ難しくはない。

問５　本文終盤にある「空間の密度を下げている」という表現の内容を読み取らせる設問である。前段落から「複数の異なる行為が」「同時並行でおこなわれる」ことの例が具体的に列挙されており、また「これが住宅という空間を濃くしている」とあることから、選択肢は容易に絞られる。

問６　昨年度から最後の設問が二つに分かれ、その形式を踏襲している。前回「ダッシュ記号の効果」を問うた(i)は、今回「『中身』？」という疑問表現の効果を考えさせている。正答の選択肢に「立ち止まる」という語が含まれていることまで前回と同じであるが、前回はやや瑣末（さまつ）な表現をつついた感があったのに対して、今回は傍線部以降の文章構成の転換も視野に入れた選択肢になっており、良問である。また、前回「この文章の構成」について尋ねた(ii)では、今回は筆者が中盤で触れている「青木淳の建築論」の引用意図を問題にしている。評論における引用意図の適切な理解は極めて重要な能力であり、良問と言えるが、受験者に短時間でここまでの構成の把握を求めるのは、やや酷にも思われる。(i)(ii)とも、選択肢が４例から選ぶ形だったことは前回どおりであり、適切であった。

第２問　芥川賞作家である加藤幸子（ゆきこ）の「海辺暮らし」（平成20年出版の『自然連禱（れんとう）』所収）からの出題である。前半は読みやすいが、最後の20行ほどで急に象徴的な描写に変わっており、この部分の解釈は難しい。本文の量は昨年度とほぼ同じであるが、初めて本文上部に行数表示が加わった。

問１　前回と同様、言葉の辞書的な意味を知っていれば答えられる語彙問題である。

問２　本文前半で、お治婆（はるばあ）さんが初対面の公害課職員を「教育のしがい」があると思った「心情」を推察させる設問である。傍線部までの本文だけでは答えられず、その後の展開における婆さんの言動まで踏まえて考えることが要求されている。

問３　本文中盤にある「“市役所”の顔色が変わった」という変化の理由となる心情を読み取らせる設問である。傍線部前後における「市役所」の発言を丁寧に読んでいけば正答は難しくない。

問４　本文70行目から始まる婆さんの「金属的音声」（カタカナ表現を採っている）による奇襲の意図を、問２で触れた「教育」とも関連させて解釈させる設問である。選択肢後半を比較していけば難しくはない。

問５　前述した後半の象徴的表現部分の「意味」を解釈させる設問である。消去法で正答は出

るが、「お治婆さんの身に起こるであろう事態（＝死？）が暗示的に描かれている」という解釈は、文学的感性を要しやや難しい。自信を持って選んだ受験者は多くなかったであろう。

問６　昨年度の「叙述の説明として適当でないもの」を二つ選ばせるという設問を踏襲して、今回は「叙述に対する説明として適当なもの」を二つ選ばせている。正答のうち③は容易だが、問５同様後半部分の解釈にかかわる⑤は根拠が明確とは言い難い。また、この両選択肢とも、「登場人物についての呼称変化が関係の変化を反映している」という側面の説明になっていることは、やや偏った問い方になっている感もある。

しかし、小説問題からこのような文学的解釈問題を抜いて客観的な読解問題のみにしてしまっては文学作品を出題する意義がなくなってしまうので、今後とも十分に吟味された選択肢による出題に挑んでいただきたい。なお、本文の引用に前回は初めてページ数がつけられたが、今回一歩進んで本文の「行数」が表示されたことは、受験者の負担を軽減する画期的な措置として高く評価したい。

第３問　中世の軍記物語『保元物語』からの出題である。前半は保元の乱で父子でありながら敵味方に分かれて戦った源義朝と父源為義が対面する場面であり、後半は義朝から為義処刑の任を課せられた家臣鎌田正清と波多野次郎のやりとりを通して、父と子、家臣たちの心の葛藤を軸に物語が展開している。軍記物語からの出題は平成17年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）追・再試験『太平記』以来である。また、登場人物を整理するための注が多く煩雑さはあったが、例年頻出の和歌を含まない文章であり、場面展開は読み取りやすかった。昨年同様、文学史に関連する問題は課されなかったが、例年の内容合致に加え、文章表現に関する問題が出された。字数は約1,900字と昨年よりやや減少したが、和歌を含まない分、ほぼ同量だと思われる。

問１　語句の解釈の設問である。㈠は「すかす」「まゐらす」の意味を、㈡は「失ふ」の対象を、㈢は「知る」「せ給ふ」の意味をそれぞれ確認する問題。㈠「すかす」は難度が高かったが、㈠〜㈢とも場面を読み取る上で重要な箇所であった。特に㈡は前後の文脈を押さえる必要があり、工夫されている。

問２　「れ」「ね」「せ」の識別を問う設問である。基本的な文法問題で、適切な出題である。

問３　義朝が「涙のすすむ」ような状態になった理由を問う設問である。傍線部直前に「と思ひければ」とあるので、直前の義朝の思いが直接的な理由となっているが、それに至る義朝と為義の会話をまとめて理解する必要がある。傍線部までの内容を確認し、その後の場面展開を理解する上でも必要な設問であろう。

問４　「理（ことわり）」の内容を問う設問である。波多野の発言を受けて鎌田が「理」と思ったのであるから、波多野が述べている内容を正確に理解しなければならない。ただ、発言の終わりに「最後の御念仏をも勧め奉り給へかし」とあるので、選択肢の後半で為義に念仏を勧めるという意味を説明している③に正答が絞られる。もう少し選択肢の内容に工夫が欲しい。

問５　為義の発言から、そこに至るまでの為義の心情の変化を問う設問である。心情の変化を問うことによって本文全体の流れを整理させる適切な出題である。五つの選択肢の冒頭に共通する「義朝の仕打ちに衝撃を受け」は傍線部を含む発言の直前にある「大きに驚きて」に

相当するので、為義の最後の発言内容を正確に押さえる必要がある。ただ、④の後半の正否についてはやや曖昧なところがあり、疑問が残る。また、正答の⑤に「自分の子に欺かれる」という記述があるが、問３の正答である④が、義朝の為義に対する態度を「欺いた」という言葉で表現したものであったため、同じ「欺く」という言葉が直接的な解法のヒントになり得ていたのではないかと思われる。

問６　例年の内容合致問題と異なり、内容と文章の表現の特徴を合わせた問題となっている。それぞれの要素について、本文との整合性を丁寧に確認していく作業が必要であり、手間を要する問題である。正答の②には「生き生きと描き出されている」のように判断に迷う表現が含まれていた。正答となる選択肢の記述においては、根拠の希薄な主観的表現は避けたい。

第４問　黄溍（こうしん）『金華黄先生文集』からの出題である。学問の道において「遜」と「敏」はともに欠くことのできない学びの態度であるが、最も重要なのは「敏」であるということを論じた文章である。文章中には孔子、顔回、曾参の話が登場し、儒教に関する知識があれば読解の一助になろう。総文字数は208字で、昨年度の171字より37字増えた。

問１　漢字の意味を問う設問である。(1)「偏」は、「偏廃」という受験者にとってなじみの薄い熟語の中にあるが、「かたよる」という読みに気付くことで正答は導き出せる。(2)「所以」は、漢文では頻出語であるが、「原因・理由」ではなく「手段・方法」の意味が問われていたので、難度が高かった。

問２　この文章のキーワードとも言える「遜」と「敏」の対比関係を理解する上で重要な箇所の解釈を問う設問である。どの選択肢も「遜」「敏」について、それぞれ解釈の前半は共通しているので、後半の吟味が必要である。「遜」については「能はざる所」、「敏」については「及ばざる所」の解釈を丁寧に検討すれば、正答に到達するはずである。

問３　孔子の言葉から、孔子は「遜」と言えるが「敏」についてはどうかを明らかにする文の(i)「書き下し文」と、(ii)「解釈」を問う設問である。文脈をよく考える必要があり、「也」「於」の意味、「曷～乎」が否定語「不」を含んだ反語形など、漢文に関する正確な知識が問われる出題であり、やや難度が高かったと思われる。

問４　傍線部直前の内容を踏まえて、筆者の考えの理由となる説明を問う設問である。「豈～乎」が否定語「不」を含んだ反語形であり、前からのつながりを正しく理解していれば容易に正答を選ぶことができるが、ここでも「遜」と「敏」を取り違えないように注意する必要があった。第三段落の筆者の主張につながる箇所として押さえておきたい問題である。

問５　文章全体で言及されている「遜」と「敏」の対比関係を改めて明確にし、筆者の主張を文脈の中で正しくとらえられるかを問う設問である。第二段落からの流れをつかみ、文章全体の趣旨を理解していればそれほど難解な問題ではないが、「遜」「敏」の内容が曖昧（あいまい）なままだと間違う可能性もある。文章全体の理解度を測る適切な問題だと言えよう。

問６　文章全体の(i)「構成」と(ii)「筆者の意図」を問うた設問である。(i)この文章が学問について述べた論理的な内容であることを理解し、主題の提示→具体例→結論という本文の流れを把握する必要がある。(ii)学問を論ずる上で「遜」と「敏」の重要性を説きつつも最終的には「遜」よりも「敏」が更に大切であるという筆者の見解が読み取れたかどうかであるが、

選択肢は直訳的ではないので、内容を一歩踏み込んで解釈する力が必要であった。正答率が低かったことから考えると、受験者の負担を減らすために選択肢は４例から選ぶ形の方がよかったように思われる。また、問５の出題と若干内容が重複した感がある点も残念であった。

３　試験問題の分量・程度等

⑴　分量について

試験問題の本文の字数（漢文以外は文字数×行数）を過去２年間と比較すると、次のようになる。

	平成21年度	平成22年度	平成23年度
第１問　評論	約4,600字	約3,600字	約4,200字
第２問　小説	約4,800字	約5,800字	約6,000字
第３問　古文	約2,100字	約2,100字	約1,900字
第４問　漢文	191字	171字	208字

⑵　設問数について

制限時間80分に対して、大問が４問、大問ごとの設問が各６問であった。この形式はセンター試験開始時の『国語』を含め、６年前までの『国語Ⅰ・国語Ⅱ』においても変更はなく、本年度も従来どおりであった。解答数は昨年度より漢文で一つ増え、37であった。

⑶　難易度について

第１問評論は、本文が昨年度より若干長くなったが、内容の抽象度が下がったため、むしろ読みやすく、適切な難易度であった。第２問小説は、昨年度のような青少年向けの作品ではなく大人の哀感を主題としている上に、象徴的な表現の解釈も加わり、本文の難易度は上がった。第３問古文は、昨年度の本文が難しすぎた反省に立ち、妥当な本文を選定していただけた。ただし、得点率は４割半ば前後と予想を大きく下回っており、多くの受験者にとってはかなり手強(こわ)い問題に映ったようである。第４問漢文は、昨年度と同様学問論を扱った抽象的な本文であった上に、字数が増加しており、易しくはなかったようである。

全体的に見ると、古典の２問が易化した分、平均点が上がったようである。

４　試験問題の表現・形式等

⑴　表現について

昨年度は３問あった「適当でないもの」を選ばせる問題がなくなった。受験者が内容を理解していながら不注意により不正解になるような事態を避けるという意味では、大いに歓迎すべき改善である。ただし国語の場合、画一的にこの原則を適用すれば、主として表現効果を問うような設問において、やや客観性（正誤の根拠）に疑問が残ってしまうことも考えられる。そのような懸念がある場合は、「適当でない」方を選ばせる形式をあえて採ることも柔軟に検討していただきたい。

⑵　配点について

第１～第４問を各50点満点とする配点に変化はない。解答一つ当たりの最高点について見ると、昨年度は小説に見られた９点配点の問題がなくなり、最高は８点（漢文においては７点）ある。従来から「１問についての配点が過重にならない」ような配慮を求めているが、今年度は更に改善されたと言えよう。ただし、これに伴って解答数は36から37へと増加しており、受験者にとって別の負担が発生するようでは困るので留意が必要である。

⑶　形式について

選択肢については、４例から一つを選ぶものが２問、５例から一つを選ぶものが33問（１問増）、６例から二つを選ぶものが１問であった。

５　要　　約（意見・要望・提案等）

本年度の平均点は111.29点で、昨年度の107.62点より3.67点上昇した。受験者は505,214名で、昨年度より7,783名の増加となった。

本年度のセンター試験は「国語表現Ⅰ」「国語総合」を出題範囲とする『国語』として実施された。来年度以降のセンター試験において本年度の経験を踏まえ、より良い問題作りを進める上で参考とされることを意図し、意見・要望等を以下に示す。

⑴　本年度の本試験は、おおむね高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、総じて高等学校の授業実態についても配慮がなされていた。また、受験者が解答を進めるなかで、素材文の理解が深まるような工夫がなされていたことも評価したい。

⑵　得点結果については、得点率５割台後半（110～120点）の範囲に平均点が収まったことから、適切な難易度だったと考える。大学側が定める受験科目の範囲指定において古文や漢文を除外する場合があり、近代以降の文章である第１問と第２問のみ解答する受験者が存在することを考慮に入れれば、６割弱になることがふさわしいからである。

⑶　第１問について、本文の長さ、内容の抽象度など、高校生が読む評論としてふさわしいものであった。設問も構成上の要所を押さえており、的確である。表現面を問う設問のあり方については昨年度改善を要望したが、今回は「疑問符（文）の表現効果」と「引用の意図」を問う、より適切な設問になっていた。高く評価したい。

⑷　第２問について、現代作家による文章ではあるが、主人公は老婆で受験者にとって共感しやすいとは言い難い上に、文学的解釈力を問う設問も多く、受験者にとってはやや難しかったようであるが、得点率は６割前後に落ち着いており、出題としては適切であった。

また前述のとおり、今回初めて小説本文上部に行数表示が付されたことは、受験者への負担軽減のための配慮として高く評価したい。願わくは、古文や評論における「注」の付け方にも工夫を加え、受験者が本文を読み進める際に思考が中断されてしまう場面を極力減らしていただきたい。

⑸　第３問について、軍記物語はセンター試験（本試験）としては初めてであったが、物語の展開に昨年度ほどの難解さはなかった。しかし、人物関係の煩雑さや武士ならではの価値観に戸惑ったのか、得点率はあまり伸びておらず、本文の長さや注釈の提示法などに改善の余地が考えられる。例年含まれていた和歌が今回なかったことは受験者の読解上負担軽減になったが、適切な数

の和歌を絡ませての出題はむしろ必然とも言える。文学史と同様、高校現場における指導の比重にもかかわってくる部分であり、慎重に検討されたい。

⑹　第４問について、昨年に引き続き論理的な文章であり、内容・構成ともにしっかりしたものであった。適切な出題とは思われるが、本文が次第に長文化、抽象化していく傾向にあり、受験者の負担は増している。古文とも合わせ、出題範囲は「古典」ではなく「国語総合」であることをいま一度銘記して、問題作成に当たられたい。